

# 哲學研究

第四十七號

第五卷  
第二冊

## 認識主觀の問題（承前）

田邊 元

三

前節に於て余は認識主觀としての意識一般は批判主義を徹底するとき凡ての現實的意識内容を離脱して唯超越的價値の全體に對應して思惟せられたる非現實的の形式的理念に止まらざるべからざる所以を明にした。之に由り斯かる主觀の對應する超越的價値は全く現實的なる意識事實を離れて絶對的に妥當する價値自體となり、ラスクの主張する如く當爲を絶して本來形式内容の融一たる超對立的原始領域を形成する。意識一般としての主觀は、即ち此超對立的原始領域としての對象が價値として妥當する對象性一般を、現實意識の認識作用に對する規範といふ方面から見たものに過ぎない。斯様に認識論的主觀が認識對象の對象性其物に外ならない所に「批判主義の特色があると思ふ。對象性は超越的理論價値或は超越的意味

が其内容(材料)に適應する形式を原始的に有して、現實意識の認識作用の内容と形式との結合に對する規範たる所に成立する。斯かる超越的意味形式の構造を論ずる純粹論理學は、斯くして全く現實的なる思惟作用を離れて之と獨立に成立することが出来るのである。ラスクやリッケルトと學統を異にして、ボルツァーノの流を汲む獨逸派のフッサールが探る所の論理學の立脚地も大體之に外なるまい。唯カントの批判主義を徹底して有極的構成主義に進んだ上記西南獨逸學派の人々と異り、ボルツァーノの文章自體から出發して、作用と獨立なる對象の存立 *Bestand* を高調するに至つた獨逸派の立場は、充分價値の妥當といふ方面を前景に呈露せしめずして、専ら文章判斷の自立に重きを置く點が其研究の重心とする所を多少異にするのみである (Vgl. Ricker, *Der Gegenstand der Erkenntnis*, S. 275)。而もリッケルトよりも一層徹底的に純粹論理主義の立場に進んだラスクがフッサールの論理學に最も接近して居るとは、カントとボルツァーノとの思想の論理的關係を示すものとして甚だ注意すべき點であらう。純粹論理學は思惟の作用と獨立に絶對的に存立する意味の形式を明にする學である。其研究に由つて意味形式の體系組織が解明せられなければならぬ。而して認識は斯かる意味形式の體系に由つて始めて其客觀性を獲得

する者であり、認識論が認識の事實ならぬ權利を問題として、其基礎附けを主とする學なる限り、認識論の最も主要なる問題が先づ斯かる純粹先驗論理學に存するとも亦否定出來ないであらう。認識の基礎附けを目的とする批判主義の精神が其最初の立脚地として純粹論理主義を必然要求するとは疑ふべからざる所であると思ふ。

併しながら純粹論理學がその形式を研究の對象とする所の、作用と獨立に存立する客觀的意味、或は之を其特殊的體現とする超越的理論價值自體なるものは、それが價值たる限り、内在的となりそれに對し現實に妥當して、其實現の可能を要求する所の現實意識主觀を豫想しなければならぬ。若しも認識の對象を超越的存在とし、認識は何等かの意味に於て之を摸寫するものであると解するならば、假令超越的存在を客觀と考へる限り、主觀客觀の雙關性に由りそれが主觀に對立するものと考へられなければならぬとしても、認識を離れて考へれば超越的存在が全然現實意識主觀と無關係に存在することは當然であつて、それが現實意識主觀に對して初めて超越的存在としての存在を獲得するに至るのであるといふ如きことは決してない、(超越的といふ形容詞は勿論現實意識主觀に對して初めて意味を有するものではあるが其意味する所は却て現實意識に對する關係の離脱にあるが故に、積極的にそれ

が存在する爲に現實意識を豫想するといふことではない)。然るに超越的なる價値の妥當に至つては之と趣を異にする。何となれば價値は如何にそれが超越的なるも、其價値であるといふことの必然の歸結として、何時かはそれが實現せられることを要求し、其爲めに内在的となる可能性を有し、それが現實に妥當する所の現實意識主觀を豫想するものだからである。超越的存在はそれが何等かの意味に於て内在的となることを必然豫想するものではないが超越的價値は必然それが内在的となり實現せられる可能性を含蓄する。若し然らざればそれは價値といふことは出來ない。認識の對象にして全然内在の可能を排するならば、假令それが價値的なりとするも、それは單なる價値ではなく、有價値的存在でなければならぬ。是れ即ちリッケルトの所謂プラトニ的價値形而上學であつて、それはやがて獨斷的實體論に墮することを免れないものである。我々にして之に陥るまいと欲するならば、超越的價値を現實的意識主觀に内在し、之に由つて實現せられ得るものと考へなければならぬ。其實現の目標として現實意識主觀の認識作用に對する規範或は理想たるもが、其價値の全體的妥當に對應する理念としての意識一般である。之を眞の認識論的主觀とし、現實意識は常に部分的に之を實現するものであつて、其爲めに絶對妥當の

超越的價值も内在的となるべきものと考へなければならぬ。余は之に由つてのみラスクの説がリッケルトの恐れるプラトンの價值形而上學に陥るとを防ぐとが出来ると思惟する。リッケルトが限界概念としての意識一般を *das fraglos bejahende Bewusstsein überhaupt* とし (Rickert, *Op. cit.* S. 347) 超越的當爲の承認をなすものとして、實は現實意識にのみ許さるべき内容を之に賦與するの不徹底を犯したのも、實は其動機は此處に存すると思ふ。併し已に前節に批評した如く意識一般は純粹形式的理念である以上、當爲の肯定承認といふ如き現實的内容を有するとは出来ぬ。それは唯超越的理論價值の全體的妥當に對應する理念に止まる。而もそれが此超越的價值の全體的存立に對應するといふことが、後者の價值として現實的主觀に内在し、之に對し現實的に妥當して、それに由り實現せられるものでなければならぬといふ要求を満足する媒介となるのであつて、全然此方面を無視することは批判主義の立場を採る限り許されない。抑も認識論的主觀としての意識一般が超越的價值の全體的存立に對應するといふのは、決して現實意識主觀が超越的價值に對立し、後者が前者を超越して而も之に對し妥當する如き關係が意識一般と超越的價值との間に存するといふ意味ではあり得ない。それは唯超越的價值が内容(ラスクの所謂範疇材料)

の形式範疇)に於ける融一的結合即ちラスクの所謂 *schlechtes Stellen* として存するのを、其價値の要件として抽象的に形式と内容とを區別し、後者の前者に對する結合を現實意識主觀の實現すべき理想或は規範としての側から主觀の極限とすることを意味するに過ぎない。即ち意識一般としての認識論的主觀は曩にも述べた如く超越的價値としての對象の對象性を現實意識主觀の規範としての側から觀た者に外ならぬ。前節にも述べたラスクの意識一般を *Repräsentant des gegenutzlosen Stehens der Inhaltlichkeit in der transzendentalen Form* とも此意味であらう。約言すれば批判主義に對しては意識一般としての認識主觀は即ち客觀的對象の對象性を現實意識の規範といふ側から見たものである。是れ批判主義が客觀を主觀に由つて基礎附けするものであるといふ立場の必然の歸結であつて、所謂ニペルニクスの轉回も之に由つて成立するのである。余は、意識一般を諸アプリオリに對する全體的統一的の *das Apriori* であると解して差支無いと思ふが、*das Apriori* は即ち客觀的對象の對象性を成立せしめるものであつて、同時に現實意識の規範となるものに外ならない。超越的理論價値の全體的存立に意識一般が對應するといふのは、前者の價値性の根據として意識一般を考へることに歸する。併し價値は前述の如く必ずそれが實現

せられる現實意識を豫想して之に内在的となるのでなければならぬから、意識一般は即ち現實意識の認識作用が部分的に實現しつゝ完全に實現し盡すことなき作用の理想としての極限概念となるのである。若し超越的對象をラスクの所謂範疇材の範疇に於ける直接融合と解し、而も之を現實意識主觀に全然關係なきものとするならば、實はそれは價值たる意味を失ひ、同時に其對象性の根據としての内容と形式との相屬を、主觀としての意識一般に屬すると考へる餘地は無くなるのである。然るに超越的對象を絶對妥當の價值として、意識一般を其價值性の根據とするのは、之を現實意識内容に關係せしめるが故に出來るのであつて、我々は意識一般を現實意識の極限概念或は理念とし、超越的價值も後者に内在的となる可能性を有し、之に由つて實現せられるものと考へる外無い。而して現實意識は認識主觀としての意識一般の理想を實現する限り客觀としての超越的對象を把捉し、自己に對して妥當する價值を實現獲得するのである。意識一般は超越的對象が其本性上必然豫想する所の現實意識を自己に引き着ける爲の理念或は極限概念であつて、同時に超越的對象が價值として現實意識により實現せられる爲めの媒介者である。於此認識の對象としての超越的價值は必ず其價值自體として有する形式的構造の研究の半面に、

それが其對象性の根據たる意識一般の理念を媒介として現實意識に接觸し、之に由つて實現せられんとする過程の研究を要求する。リッケルトがラスクの如き純粹論理學の立脚地を漸次高調しつゝも、猶認識論は一方に於て、認識の對象を明にすると同時に他方に於て、對象の認識を明にする職分を有すると考へ、之を以て直に先論驗理學と同一視することを肯んぜず、先驗心理學の權利を主張したのも之に由るのであつて、余は其主張の正當なるを認めなければならぬと思ふ。縦超越的なる意味形式の諸體系は之を意識するとせざるとに拘ず妥當するものであつて、それは全然現實意識に顧慮することなく其の構造が明にせられるものであるとしても、意味は現實意識に内在する可能性を有することに由つて始めて其意味たる實を擧げ、價値は其實現せられる現實意識主觀を豫想して初めて價値となるのであるから、之に對應する理念的主觀としての意識一般を現實意識主觀の極限或は理想として、之を通じて超越的對象が現實意識主觀に關係する仕方を明にする研究が無ければならぬ。我々は超越的なる對象が何等かの方法に於て現實意識に内在的となり、而して意識一般が此現實意識に由つて實現せられる所以を明にせんとする要求を如何にするも抑へることは來ない。超越的價値としての客觀的對象と意識一般として



の主観とは何等かの方法により現實意識と相交渉するのでなければ、實はそれが認識論上の客観たり又主観たる意義を失ふ者である。リッケルトが飽く迄認識論の此方向を重視して、先驗論理學の外に先驗心理學の權利を主張したのは、或は純粹論理主義の人から見て不徹底であるといはれるかも知れぬけども、併し認識論の問題を任意に制限しない限り、氏の立場は廣く批判哲學の上から見て正當の根據を有するものと認めなければならぬ。氏の説の缺點は唯充分徹底的に先驗論理學と先驗心理學とを區別して、前者の立場を純粹に認め、意識一般の純形式的理念性を徹底するとをなさず、此處に先驗心理學の立場を混入した點に存するのであつて、先驗論理學に對し先驗心理學の權利を認識論の内に主張すること自身が不可なのではない。然らば超越的なる價值は如何にして現實意識に内在するに至るか。惟ふに此問題は凡て超越的なるものが如何にして内在的となるかといふ問題が哲學的認識の答ふる能はざる終極の *Mysterium* なる如く、到底理論哲學としての認識論の答ふる能はざる限界をなす者であつて、我々は唯其實を事實として承認する外に道が無いであらう。リッケルトは一方に於て先驗論理學の立場より凡ての客観性を要求する判断(文章は其内在的意味(所謂 *Urteilsinn*))の外に、之に對應して而も判断意識を

全然超越する *Urteilsgelalt* 即ち超越的意味を有し、其形式が判断に客観性を賦與する者なることを説き、而して此意味が其否定の性質より考へて價值形象に屬せざるべからざることを示すと共に、他方先驗心理學の立場より、判断意識の分析を通して其承認の對象として超越的當爲を發見し、此が前述の超越的意味の判断意識に接觸する一面であると解して、認識論の兩方面を結合しやうと欲した。此際氏がラスクに反對して超越的意味に於ける形式範疇と内容範疇材料との合一が本來單なる *Nurammen* ならずして、何處までも主觀の承認に由つて成立する *Zusammengehörigkeit* ならざるべからざることを説いたのは (Ricker, Op. cit. S. 386) 已に前に述べた様に意識一般としての主觀が實は單に對象性一般を現實意識に對する規範としての側から形式的に意味し、それが純然たる非現實的理念ならざるべからざる限り意味無きこととなり、我々はラスクの如く超越的意味に於ける内容と形式との本來的合一を認めなければならぬのであるが、兎に角超越的對象が現實意識に接觸する一面に於て其意識の判断作用に對し當爲として現れるといふことは、ラスクの如く認識論の問題を單に内容と形式との關係に限らず、主觀と客觀との關係にも及ぶものと考へる限り正當なる見解と認めなければならぬ。併しながら先驗論理學と先驗心理學とを結

合して、後者の認識對象として發見せる超越的當爲を前者が認識の對象とする超越的意味或は其絶對理論的價値の判斷意識に接觸する一面であると解することは説明を容れざる原始的の事實であつて、我々は初より判斷の中に超越的なものの指示が含蓄せられることを豫想して、之を當爲として現るゝ超越的價値と解するのに過ぎない。リッケルトが明に説いた通り超越的と内在的とは概念上飽くまでも相容れない者であつて、此兩域が如何にして統一せられるかは永久に解くべからざる問題であり、我々は唯其統一の事實を認める外無いのである。我々は唯本來超越的な意味が現實意識に内在的となるといふとを原始的事實として、之を認識論の出發點と認めなければならぬ。假令先驗論理學が超越の意味をその意識に内在するといふことから離れて、之と全然獨立に其形式的組織を明にすることが出來るとしても、斯かる意味形式は意識に内在して初めて意味を成立せしめることが出來るのであるから、我々は此意味の内在といふ事實を認識論の根本豫想としなければならぬのである。此處に斯學の如何にするも越えらるゝの出來ない限界が存する。我々は唯此根本事實を認め、之を豫想して意識事實の意味に對する關係を解釋する外無い。我々の先驗心理學的に解明し得る所は超越的價値或は意味が現實意識に内在

する根據の何たるかでなくして、其仕方の如何に止まる。

斯様に超越的意味乃至絶對妥當の理論價值が如何にして當爲を通じて現實意識に内在するに至るかといふとは認識論に對し越ゆべからざる限界であつて、我々は唯之を原始事實として承認する外に道が無いのであるが併し超越的價值形象としての意味の有する形式が當爲を通じて現實意識に接觸し、其肯定承認に由つて前者が實現せられるといふのは、一方に於て全然意味の形式を含まざる現實意識の内容なる者があり、他方に於て超越的なる意味の形式なる者存立し、兩者が我々の知る能はざる方法に於て當爲の中に始めて相會合するといふ如きものではない。此様に考へるのは抽象の結果として現れるものを初めより獨立自存するものの如く見做す顛倒の觀方である。斯かる立場に立つ限り我々は如何にして意味形式と意識内容とが相適應し得るかを理解することは出來ぬ。かくては唯兩者の豫定調和を假定する外無いであらう。然るに元來意味形式なるものはそれが意識内容に内在すると否とに拘らず妥當するものではあるけれども、其意味形式の何たるかは夫々の内容に即して始めて定まるのである。例へば因果といふ意味形式或は範疇をとつて考へて見るに、成程カントの所謂純粹悟性概念としては普遍概念たること疑無いが、

併し現實の認識對象を成立せしむる意味形式としては夫々の内容に依存して夫々特殊の因果的關係を表はすのでなければならぬ。唯我々は夫々の内容を不定にし、之に依存する關係の特性を不問に附するが故に普遍的なる關係形式として一般概念と認め得るのである。併しそれが現實の内容と結合する場合には後者の特性に應じて特殊化せられなければならぬ。宛も形式は獨立變數の特定の値に由つて特殊の値を取る從屬變數を前者との關係に於て普遍的に表はす函數の如き者である。それは單に抽象的なる普遍概念でなくして具對的普遍的關係を表はす函數概念でなければならぬ。意味形式は現實意識内容に即して始めて實際に意味形式となるのである。若し全然意識内容を離れるならば實は意味形式も意味を成立せしめることは出來ぬ。超越の意味が當爲を通じて意識に内在するに至るといふのは、前者が後者と全然離れて存立し、兩者が當爲の媒介に由つて結合せられることなく、實は意味形式を特殊的の種別に於て内面的に含蓄する原始的意識内容が先づ存し、而してそれが我々の知るべからざる理由に由り分裂して意味形式を顯現し、其分離せる意識内容と區別せられて、兩者の顯在的合一が其不合一的分裂的意識に對し超越的となり、此一度分離せられたるものの結合の要求が當爲として現れるのであると

考へなければならぬ。ラスクの説に従つて認識の對象とした範疇材料と範疇との本來的合一は、已に意味形式(範疇)と意識内容(範疇材料)との分裂せる認識の段階に對しては全然超越的なる理念であるけれども、兩者の適應調和が可能なる爲めには却て認識以前の段階に於て、兩者の内面的結合が原始事實として存するのでなければならぬ。元來リッケルトの唱へたやうに認識の對象を超越的なる價值或は當爲とすれば、斯かる價值或は當爲は理念としては唯一の絶對理論價值乃至當爲ともいふべき者であるけれども、之を個々の認識に就いて考へるならば、夫々の認識の個性に従つて特殊の意味或は價值形象として現れる者でなければなるまい。然らば其意味も具體的には内容の個性に従ひ特定の關係形式に形成せられたものであつて、先驗論理學は唯前者の個性を不定にする限り前者が個々の意味形式を其特殊化として有する普遍者と認められるに由り、之を一般的に對象とすることが出来るのである。之に對し先驗心理學の立場は此内容から抽象せられた普遍的の意味形式を本來全然意識を超越するものとして、此が如何にして現實意識内容と結合するに至るかを明にするとではなく(此は已に述べた如く到底不可能の企圖である)、逆に斯かる抽象以前に遡り、意味形式が現實意識内容と内面的に結合せるものを分析記述する

のでなければならぬ。約言すればラスクが認識の對象とする範疇と範疇材料との絶對的融一を現實意識の彼岸に求めずして其奥底に求め、之を分析記述するのでなければならぬと思ふ。我々の直接意識は *an sich* には超個人的であつて、其内に範疇と範疇材料との本來合一を原始未分の状態に於て含蓄するのである。此が分裂して兩者の分裂せる者が吾人の現實意識に於ける判断の内容に屬し、兩者の合一はそれに對し超越的なる對象と考へられるのは正に *für sich* の段階である。而して當爲に基く正しき判断に由り吾人が範疇材料と範疇との眞なる合一を認識として獲得するのは、是れ即ち *an und für sich* の段階に於て本に還ることに外ならぬ。認識は斯かる圓環作用であつて、先驗論理學は *für sich* の段階に於ける範疇形式の抽象的なる研究をなし、先驗心理學は還元的に *an und für sich* の段階から *an sich* の段階に於ける本源を回顧して、形式と内容との歸一をなす認識の圓環過程を研究するものでなければならぬ。但し認識の妥當に對する保證は理論哲學の立場に立つ限り先驗論理學の對象とする範疇形式の絶對自立的なる存立に求めなければならぬのであつて、先驗心理學は唯之を豫想して其内在を還元的に研究する外無い。決して先驗心理學が自ら認識の妥當に對する權利根據を與へるとは出來ぬ。従つて先驗心理學

も先驗論理學の視點に従ひ意味形式の一般的構造に注目し、其意味内容の個性は之を不定に放任して普遍的なる形式内容の關係のみを考察するより外はない。此處に先驗論理學の先驗心理學に對する優先がまた現れて居る。併しながら先驗心理學の目的とする所は、先驗論理學の對象とする意味の形式がそれに適應する普遍的なる内容と結合したものを認識の對象として現實意識が獲得する過程を、内面的なる形式關係の内容と未分に融一する原始意識を回顧することによつて圓環過程として認識せんとするものであるから、内容の個性従つて之と結合する意味の個性は已述の如く其限界外にあるとしても、兎に角普遍的なる形式に適應する普遍的なる内容と結合したものととして、形式と内容との一般的なる合一を考へるのでなければならぬことは疑無い。約言すれば意識を其直接原始的なる状態に於ては一般に内面的なる意味形式が内容と未分に融一してたものであると考へる立場に立つのでなければならぬ。此處に先驗心理學の特有の立脚地があるのである。

## 四

今までは先驗論理學を先驗心理學の成立の豫想とし、前者は全然後者を俟たずし



て自完自足的なる者であると考へて來たのであるが、先驗論理學は果して此の如く先驗心理學と全然分離して自己充足的に成立し得るものであらうか。余は此間に對し或意味に於ては肯定的の答を、或意味に於ては否定的の答を與へるべきものであると思ふ。特に先驗論理學に止まらず、形式論理學をも含み、一般に論理學を純粹論理學として全然意識事實と獨立に、所謂永久眞理の體系として建設しやうとする試は、もと其示唆を純粹數學に得たものであると思ふが、若しも數學が其終局の根本概念を定義すべからざるものとして單に不可證の公理(公準)に由り其關係が規定せられたものと認め、斯かる undefinierbare Grundbegriffe を含む unbeweisbare Axiome (Postulate) の上に假言的論證の體系を建設する如く、論理學も單に定義すべからざる根本概念を含む不可證の公理を掲げ、それより導かれる論理的關係を組織するに止まるものであるとするならば、確に論理學も純粹論理學として全然意識事實と獨立なる成立を遂げ得ると思ふ。併し此の如き論理學は曩に述べた如く實は其對象とする意味の形式が眞に意味の形式として現實意識に對する規範理想となる價值形象を成立せしむるものであるといふ意義を含むとが出来ないばかりでなく、其論證體系の基礎となる公理、それに含まるゝ根本概念が單に設定的に止まるといふ點に於て飽くま

で *Gründlichkeit* を求むる哲學の分科であるといふ資格を失ふことになるであらう。而も已に斯かる論理の根本概念、公理は論理の根柢となるものであるから、我々は到底之けを他から誘導し、他に由つて證明することは明に出來ない。之に對しては我々は唯 *Fieri* の立場から其成立の由來を明にする外に道は無い。然るに此は直接原始意識を本來意味關係を内面的に含蓄するものとして、論理の終局的根本概念及び原理から回顧的に其基となる内面的關係を直接意識事實に於て求め、之に由つて前者の *Fieri* を理解するより外に他の方法を容れないと思ふ。於此先驗論理學は却て其半面に先驗心理學の補足を俟つて初めて哲學の一部門としての位置を確保することが出來るといはれる。而して其先驗心理學は單にリッケルトの場合に於ける如く唯認識作用の何たるかを求めて判斷作用を之に當て、更に判斷意識の分析に由り其對象として超越的當爲を發見し、之を以て超越的意味を指示すると解するに止まる者でなく、更に一層根本に立入つて斯かる判斷作用と其對象との基たり由來たるものを求め、超越的意味は本來如何なる仕方に於て意識に内在するか、意味形式と内容とはもと如何なる仕方に於て結合するかを明にするものでなければならぬ。其場合に採る所の方法が直接意識から出發して、それに内在する超越的意味を顯現し、之

を根據として客觀的對象の構成を基礎付けしやうとするものでなく、逆に先驗論理學に由り基礎付けせられたる客觀的對象の構成から溯源的に、其基となる超越的意味を内在せしむる直接意識の一般的再構成を試みるものでなければならぬことは己に今まで述べた所で明であらう。余は此處にナトルプの所謂再構成、主觀化の説の没すべからざる意義があると思ふ。

ナトルプの再構成 *Rekonstruktion* 主觀化 *Subjektivierung* の方法が果して眞に心理學の唯一正當なる方法であるかどうかには就いては恐らく種々の異論があるであらう。余は其説の充分なる理解に就いて少からぬ困難を感じる者であつて、容易に其當否を批判する能はざると思ふと共に、此方法が果して現實意識の學としての心理學を完全に基礎付けし得べきや否やに就いて疑無き能はざる者である。唯併しながら單に現實意識の内容を研究の目的とせず、先驗論理學の明にする自立的なる意味形式をそれに對應する内容一般と融一せるものとして、それが現實意識に内在する仕方を明にする先驗心理學が此方法に依らなければならぬとは、今まで述べ來つた先驗心理學の本性上から考へて、否定すべからざる所ではないかと思ふ。勿論此場合に於てもナトルプのさふ通り (*Natorp, Allgemeine Psychologie nach kritischer Methode.*

142  
S. 233—240) 完全なる主觀化は理想であつて、己にそれが認識として概念的に規定せられる限りそれだけの客觀化を受けた者でなければならぬであらう。併しこれは一般に認識其物の制限であつて、兎に角先驗心理學は之を其理想或は嚮導理念として此方向に向ふものでなければならぬ。而して此は認識の對象性の根據としての意味形式がそれに適應する一般的内容と融一せるものとして現實意識に内在する仕方を、遷元的主觀化的に再構成しやうとするものであるから、其限り an sich に於ける意識一般の心理學であるともいはれる(「ナルプが universelles Erleben, universelles schlechthin konkretes Bewusstseinを以て心理學の嚮導理念とするのも此意に解せられる」<sup>224—225</sup>参照)。此處にそれが先驗心理學として先驗論理學を補足するものたる意義を有するであらう。フッサールの所謂現象學も惟ふに亦斯かるものでなければならぬのではなからうか。氏は、其所謂現象學的還元 *phenomenologische Reduktion* に由り凡ての客觀的對象界構成の立場を *einklamern* し *ausschalten* して、意識に内在する本質 *Wesen* を明にする研究を本質學 *Wesenswissenschaft* としての現象學と認め、而してブレンターノの先蹤を追ふて意識の本質に志向的對象の方面に屬するものと之に對應する作用(或は、一層精しくいへば作用性質 *Aktualität*)に屬する方面とを分ち此兩方

面の本質を明にするのが現象學の任務であるとするのであるが、後に説く如く志向的對象(一層適切にいへば志向的内容)と作用との對立を區別するのは己に反省の結果であるから、意識の直接體驗が此兩方面を含むといふとは單に反省抽象の結果としてのみはれることであるけれども、後に客觀的對象界を構成する意味の意識内容に於ける内在を其構成の立場から還元的に其基に遡つて、直接意識に此意味の内在を認めるものとしては、現象學は確に意識の此の兩方面を本質觀照 *Wesensschauung* の立脚地がら記述することが出来るであらう。唯併しながら所謂本質觀照に依る現象學的記述なるものは、單に對象界構成の種々の立脚地、所謂 *natürliche Einstellung* なるものを *einklammern, ausschalten* するのみで出来るとは思はれぬ。却て種々の *natürliche Einstellung* の基として種々の對象的方面に於ける本質が對象界構成のアプリオリとして現實意識に内在する仕方を用用の方面に於ける本質の統一に關聯せしめて主觀化的再構成的に原始意識の統一に於て認識するのでなければなるまい。而して其場合種々の本質が絶對的に固定せられたものでなく、ナトルプの所謂 *Potenz* の段階に於て相對的に定められる者であるとするならば (Vgl. Natorp, Op. cit., S. 287—290) 益々其方法は主觀化再構成に依るものでなければならなくなる。ナトル

ブがフッサールの立場も自己の立場に歸さなければならぬと説いたのは(頁 290)此意味に於て正當であらう。唯余は主觀化に由つて意識を再構成的に認識する心理學が單なる主觀的のものでなくして、客觀性を有する普遍妥當的の認識であり得る爲には、何處までも其客觀性の保證を其還元の出發點となる客觀的構成の先驗的意味の方に求めなければならぬから、其再構成的主觀化的認識の對象となるのは客觀的構成の基たり背景たる限りの本質的關係の統一であつて、其成果は單なる現實意識の認識でなく *an sich* に於ける意識一般たる限りの現實意識の認識となると思ふ。フッサールが現象學の對象として所謂 *phänomenologische Erfahrung* 即ち凡ての客觀的對象構成の *These* を *ausser Aktion setzen* する作用を行へる後に殘る所の所謂 *phänomenologisches Residuum* *ist* *das* *reine* *Bewusstsein* *in* *einem* *absoluten* *Eigensein* であると云つたのも (Husserl, *Ideen zu einer reinen phänomenologie u. Phänom. Philosophie*, I. S. 94)之を示すものではあるまいか。ナトルプの主觀化再構成は斯かる純粹意識の學としての心理學を基礎附けする方法ではないかと思はれる。余は曩にナトルプの所謂主觀化再構成の方法が少くとも意識一般の學としての先驗心理學には正當なるものであらうと云つたが、今や又それは先驗心理學單に純粹論理學に止まらず凡ての純粹價值學に對

應する最も廣き意味に於ての先驗心理學を謂ふの方法としてのみ正當の根據を有する者なる所以を認め得るやうに考へる。而して斯く考へるとに由つて、フッサールが先驗心理學も亦心理學である、即ち事實學である、其限り本質學としての現象學と區別されなければならぬと主張したのに對して、リッケルトが現象學も先驗心理學としてのみ可能であるといつたのを是認し得るやうに思ふ (Vgl. Rickert, Op. cit. S. 304)。

先驗心理學は決して單なる事實學ではない。それは、意識一般を實現する限りの現實意識を其客觀的對象界構成の基に還元して、其意味內在的原始的意識の構成を明にせんとする者である。其故それは明にフッサールの意味に於て本質的必然性本質的普遍性を有する意識現象の學である。即ち本質學としての現象學も之に歸するといふに何の支障も無いではあるまいか。唯余が此場合特に注意しなければならぬと思ふのは、果して *an sich* に於ける意識一般たる限りの現實意識を本質に分解し盡し得るか、一層精しく言へば單に志向的内容と之に對應する作用の兩方面から意識を本質に分解して、之に由り完全に意識を再構成的主觀化の立場から認識したといひ得るか、單なる本質として認識することの出來ぬ何ものかが尙意識を意識として成立せしむるに必要なるものとして主觀化再構成の際に認められなければなら

ぬではあるまいかといふ問題である。余は之に對し現象學的本質觀照が單なる體験でなくして所謂 *natürliche Einstellung* の *Einklammerung, Ausschaltung* に由り客觀的對象界構成のアブリオリを其内容と作用との側から本質として反省したものである以上、此は一定の本質的内容を内在的に含む本質的作用を、作用の作用ともいふべき根本的の意識統一の立場から觀ることを豫想するものであるから、後者即ち作用の作用としての根本的意識統一は本質として反省することは出來ないのであつて、而もこれが意識を意識として成立せしめ、各本質をして意識の本質たることを得しむるものであると考へる。此意識の統一を「我」と名けるならば「我」は本質として現象學的に觀照せられることは出來ぬものであつて、而も諸本質をして意識の本質たらしむるものであるといはなければならぬ。フッサールが其論理研究の第一版に於て體験を統一する「我」は「多様の體験の上に浮游する特別のものでなく、單に其等自身の結合統一と同一なるものである」と考へ、斯かる「我」と體験との關係が何等 *eigentümlicher phänomenologischer Befund* として現るものにあらざることを主張したのに對し (*Husserl, Logische Untersuchungen I. Aufl. II. S. 331*. 序ながらフッサールは此問題を論理研究には *irrelevant* なるものと認めつゝ、猶第二版に之れを保存し、而して其理由を今述べ



んとするナトルプの批評の重要なことに歸したのは學者的精神の發露として尊敬すべきものと思ふ(Vgl. Log. U. II. Aufl. II. 1. S. 368) ナトルプが體驗内容の統一の *Heisgrund* としての「我」に對する關係が終に除去すべからざることを高調したのは此點に於て正當であると思ふ(Natorp Op. cit. S. 33-37)。現象學的還元によつて内容と作用との兩方面に於ける本質が明にせられたとしても、更に其等が具體的なる意識を成立せしむる爲めには所謂 *Phänomenologischer Befund* として現れず、本質として觀照せられざる統一の根柢が無ければならぬ。此は自ら統一するはたらきなるが故に他に由つて統一せられることの出來ぬものであり、従つて本質として現象學的に觀照せらるゝ能はざるものである、本質として觀照せられるものは何處までも「意識せられたもの」に屬するものでなければならぬのであつて「意識するもの」ではあり得ない、而も斯かる「意識するもの」精密にいへば「意識せられるもの」をして「意識せられしむる統一の根柢即ち意識の根柢たるものがあつて始めて現象學的研究が可能となるのである。前述のフッサール自身の所謂 *das reine Bewusstsein* 或は「論理研究」の第二版に所謂 *das reine Ich* (Log. U. II. Aufl. II. 1. S. 359) も實は之を意味するものでなければなるまい。然るに氏は斯かるものを認めても猶之を本質とするのではないかと思はれる

が、併しこれは如何にするも本質として觀照する能はざるものであつて、單にナトルプの所謂主觀化の極限となるものでなければならぬと考へられる。余の所謂意識一般は其 *Epoch* の段階に於て即ち此純粹意識、純粹我を統一基礎とするものに外ならない。於此斯かる意識一般を嚮導理念とする先驗心理學は單なる本質學であるといふことは出來ぬのであつて、其點から之を事實學であるといふならば、其所謂事實は質本に由つて基礎附けせられた事實でなく、本質をして志向的内容の側と作用性質の側と相關係せしめ、本質學としての現象學をして何等かの意味に於ける意識の學たらしむる根柢となる原始事實であるといひたい。斯くして余は意識を主觀化、再構成に由つて明にせん、とする先驗心理學となることに由つてのみ現象學が其本分を發揮し得るのであると考へ、此處にナトルプの方法に對する制限を明にし、フッサールの思想を補充して、リッケルトの立場を深めることに由り三者の結合點を見出し、以て認識主觀に關する先驗心理學的研究の道を求めたいと思ふ。而して斯様にカント學派とホルツァーノ學派とが何れも一方論理主義を徹底することに由つて接近すると同時に、他方先驗心理學的立脚地に於て亦相通せんとする所のあることは我々に由つて充分注意せらるべき點でなければならぬ。(未完)